

# 白山における繁殖期の鳥類相 (予報)

長谷川 博 東邦大学理学部生物学教室

## ON THE AVIFAUNA IN THE BREEDING SEASON IN THE MT. HAKUSAN AREA

Hiroshi HASEGAWA *Department of Biology, Faculty of Science, Tohō University*

白山における繁殖期の鳥類相をいくらか定量的に把握する目的で、1973~1975年にかけて、毎年1回6~8月にライン・トランセクト法によって調査を行なった。調査結果は現在整理中で、近いうちに報告を整めるが、ここでは数カ所での調査結果を例として、センサス法との関連で概要を述べることにしたい。

ライン・トランセクト法は、正確さでは劣るが、少ない労力で広い範囲をカバーすることができ、しかも各種の多さの目安を得ることができるという点で有利であり、鳥類のセンサス法として比較的良好に用いられている。しかし、従来の調査ではある地域をただ1回歩いて得た結果のみが用いられることが多く、調査結果の信頼性に関してはほとんど触れられていない。1回歩いて得られる記録の信頼性を吟味する一つの方法は、同一場所を最低2回反復調査し、記録の再現性を検討することであろう。このことを念頭におき、白山の鳥類センサスでは、時間と労力の許すかぎり、同一場所を反復調査して、異なった環境ごとに、このセンサス法の有効性を吟味した。

調査の際は、確認した鳥と観察者との距離を推測して記録したが、繁殖期には囀っている個体を確認することが多く、目立ちやすいので、たいていの場合50m以上で記録されてしまう。このため、50m以内で記録された種に限定した場合、種類数が減ってしまうこともあり、また個体数の少ない種は50m以内で記録される場合が少ないので、観察幅を片側100mにとって個体数を集計した。特に目立ちやすい種では、100m以上でも容易に確認されるので、200m以内で発見した個体数をも付記しておくことにした。ただし、生息個体数密度が高い場合、遠くにいる個体を十分に区別することができなくなり、比較的近距离で確認される個体を主に記録せざるを得なかったため、方法の一貫性を欠くことになってしまった。

白山の低山部と高山部数カ所で行なった調査の結果を例として表示した。同一場所を2回センサスした場合個体数の多い種は2回とも記録され、個体数の少ない種では記録されない場合が生じる。ただし、ホトギスの仲間とか、コマドリなど、特徴的で大きい声の囀りをもつ種では個体数は少なくとも記録される確率が高い。種類数について2回のセンサス結果を比較すると、河川ぞいの灌木・ブッシュが茂る環境ではそのちらばりが大きく、ブナ林や高山部のササやぶでは小さくなる。観察努力量(時間)を考慮に入れる必要があるが、このことは、高山部では1回のセンサスで大部分の種類を発見できるが、低山部では生息している種類数も多く、1回だけのセンサスでは特に個体数が少なく、目立ちにくい種を見落している可能性が高いことを示すと言える。

種類数はブナ林で多く、それと他の植生との移行部ではより多くなっているようである。植生構造の単純な高山部では種類数は少ない。相対的な鳥類全体の個体数密度を、2回のセンサスで100m以内で確認した全個体数を単位時間あたりになおして評価すると、低山部では低密度で、高山部ではかなりの個体数密度となっていることがわかる。種類数と個体数との関係でこの点は興味深い。

また、表からは、ブナ林に生息する種、高山部でのみみられる種、あるいは種々な環境に生息している種、また、特定の地形的要素と対応して生息している種などが浮きぼりにされ、各種の環境分布の一面が明らかにされるものと思われる。

